

# シロバエ考 底延縄漁師の漁場認識とフォーク・モデルの意義

Deep-sea Long-lining Fishermen's Fishing Ground Recognition  
and the Significance of Folk Models

中野 泰

①問題の所在と本稿の目的

②フィールドの概観

③漁場の認識

④底延縄による漁場探索と操業の指針

⑤漁撈日記に見る操業の実際と延縄漁の近代化

⑥民俗知識の伝承

結論

【本文要旨】

本稿は、①遠洋漁業の漁場認識から、漁師の民俗的思考の性格を明らかにし、②その結果を受け、民俗学におけるフォーク・モデルの積極的意義を主張する。漁業習俗の民俗学的研究は、漁民が持つ多様な民俗知識や技術を明らかにし、特に、漁場認識についてはヤマアテの研究を蓄積している。今後は、海上に目当てとなるものが存在しない場合（ヤマナシ）をも含めて、漁場探索の全体像を明らかにする必要がある。ここでは、ヤマナシの漁場の例として、山口県の玉江浦を基地として行われていた、東シナ海における底延縄（アマダイ）漁を対象として、検討する。この漁法は、シロと呼ばれるアマダイの棲息域を狙って行われるもので、シロバエと通称されている。

この論文では、聞き書き手法の積極性を活かすために、「漁撈日誌」の操業実態と対照させた。これにより、認識と行為との間の共通性や差異を明らかにし、かつ、機器の導入以前と以後とを対比させることで、近代的機器の導入による漁場認識や利用の変化を検討した。

結論は以下の通りである。①ヤマナシの海上における漁場認識が、海底の質や、魚類を含む混獲物との関係性の把握に基づいていること、②現実の操業は、必ずしも、その認識通りでなく、柔軟に組み立てられていたこと、③漁場認識は、船頭の個人的な経験に基づく個別性に支えられていること、④漁場の知識は、近代的機器の導入により、秘匿される性格を増すと同時に、その性質を変化させ、安定的な漁獲高の達成に一定の効果を見せたこと。漁場の民俗認識は、必ずしも、魚の生態の事実を反映しているのではなく、科学的な見解との間にギャップがある。そのギャップの存在から、民俗学は、民俗的認識をフォーク・モデルとして把握し、その有効性を説くべきであると主張した。